



## 株式会社大本組

東京本社土木部次長兼  
東京支店土木部長

### 浮田 洋一 さん

うきた・よういち

1987年鳥取大学工学部土木工学科卒、大本組入社。中部国際空港護岸等築造工事主任技術者、伊万里港久原南地区橋梁耐震補強工事現場代理人などを経て、2020年東京本社土木部次長兼東京港出張所所長、2021年6月から現職。岡山県出身、58歳。

# あの頃、 思い出の現場

## 浜田港港湾改修工事

### 自分の目で見る経験を重ね 土木屋の勘 育む

現場でのものづくりに興味があったので、大学卒業後の進路は建設会社に決めていました。海洋施設工学の知識が生かせるのではと、大本組に入社し、最初に配属されたのが島根県の浜田港作業所です。現場では浜田港の沖合に、新たに延長350mの防波堤を築造する工事が始まろうとしていまし

た。6,000tの大型ケーソンの製作、据付を通じて、さまざまな経験を入社1年目から積むことができ、今でも忘れられない、思い出の詰まった現場です。

国際貿易港の浜田港は、重要港湾であり、日本海側拠点港に指定されています。日本海側は、お盆の時期を過ぎると波が高くなり、海上作業ができない日が多くなることから、沖防波堤築造工事では、8月中旬までにケーソンの据付作業を完了させることを目標に工程計画が立てられました。フローティングドック(FD)によるケーソンの製作と同時進行で、5月から施工場所での捨石投入と均し作業が開始されました。

捨石均しは潜水土による作業となり、水深が

18.5～25.0mと深く、潜水病の危険があるため、1日の潜水作業時間の管理が重要になりました。減圧時間などを考慮しながら効率的で安全な潜水作業計画を立てるのですが、当時は計算尺を使って職長と色々なケースを作成したことが印象深く思い起こされます。

ケーソンは1函が幅25.4m、長さ20.0m、高さ20.5m、重量は6,000tに及びます。その製作は、浜田港内の長浜地区で行いました。全8ロットの製作工程のうち、1～4ロット(高さ10.9mまで)をFDで施工した後、ケーソンを進水させ、隣接する製作マウンドに移動して5～6ロット(高さ15.7mまで)を施工し、再びケーソンを浮上させ、仮置マウンドへ移動して海上打継ぎにより7～8



ケーソン据付完成検査状況

ロット(高さ20.5mまで)を施工しました。

当時、FD、起重機船、ミキサー船は自社船を使用し、直営で施工を手掛けていました。私も船団長の指示を受けて測量を行ったり、コンクリート打設や中詰均しを手伝ったりしました。面倒見の良い先輩たちから、時に厳しく、現場教育を受けながら新入社員としてひとつひとつ仕事を覚えていきました。

港湾工事に欠くことのできない気象情報を当時は主にラジオから得ており、作業所で毎日、ラジオを聞いて天気図を作成し、それを所長が読み込みながらケーソンの据付日をいつにするかといった作業内容の打ち合せに使っていました。気象衛星から常に最新の情報が送られてくる現在とは隔世の感がありますが、天気図を見て自分たちで気象・海象状況を予想し、判断していました。

いよいよケーソン据付の日。私は防波堤の法線管理を担当し、トランシットを使いながらケーソ

ン据付位置への誘導作業に当たりました。沖防波堤の1函目のケーソン据付なので、とりわけ高精度の施工が求められました。潮の流れや波高の影響で据付が夕方までかかったこと、据付完了後は台風対策のため、中詰から蓋コンクリートの打設までを急ピッチで進めたことが思い出されます。

浜田港作業所で2年間過ごし、河川の災害復旧工事などを担当した後、1993(平成5)年に再び浜田港作業所に戻りました。所長の計らいで、沖防波堤の最終ケーソン据付工事の陣頭指揮を任されました。不安や緊張に負けず、無事完了できたことで、困難があっても乗り越えられるだけの自信ができました。色々実践させてくれたことに、当時の先輩や仲間達には感謝しています。



FDからのケーソン進水移動状況

所長からよく言われたのは、「教わるのではなく、自分で見て覚えろ」という言葉でした。仮設計画では自分で構造計算して安全性を確認する、現場の状況は必ず自分の目で見て、自分の耳で聞き、自分の肌で感じることで把握する。もちろんダブルチェックはありましたが、先輩に頼るばかりではなく、自分で計画し行動すること、そうした経験を通じて、正しい判断が可能な「土木屋の勘」が醸成されると感じています。

現在、建設業界は生産性の向上のため、DX(デジタルトランスフォーメーション)の促進が叫ばれています。働き方改革を推進する上でも情報通信技術の積極的な活用は必要不可欠だと思います。しかし、その収集したデータがこの現場に適しているのか、誤ったデータではないのかを最終判断するのは現場です。誤った判断をしないためにも、自分の肌で感じとることができる若手技術者を育てていきたいと思っています。